

学校法人天理大学
平成21年度 事業報告書

1. 法人の概要

(1) 設置する学校・学部・学科の名称および入学定員と学生数

【天理大学】

平成21年5月1日現在

学部等	学科等	入学定員	収容定員	学生数
人間学部	宗教学科	80	320	285
	人間関係学科	80	320	342
	計	160	640	627
文学部	国文学国語学科	40	160	179
	歴史文化学科	50	200	206
	計	90	360	385
国際文化学部	アジア学科	150	600	571
	ヨーロッパ・アメリカ学科	200	800	773
	日本学科	募集停止	0	0
	朝鮮学科	募集停止	0	0
	中国学科	募集停止	0	0
	タイ学科	募集停止	0	0
	インドネシア学科	募集停止	0	0
	英米学科	募集停止	0	0
	ドイツ学科	募集停止	0	0
	フランス学科	募集停止	0	1
	ロシア学科	募集停止	0	0
	イスパニア学科	募集停止	0	0
	ブラジル学科	募集停止	0	0
計	350	1400	1345	
体育学部	体育学科	170	680	832
総合計		770	3080	3189

【天理大学大学院】

平成21年5月1日現在

学部等	学科等	入学定員	収容定員	学生数
臨床人間学研究科		8	16	15

【天理高等学校】

平成21年5月1日現在

学 部 等	学 科 等	入学定員	收容定員	学生数
全日制課程（第一部）	普通科	※ 520	1560	1260
定時制課程（第二部）	普通科	108	432	427
	介護福祉科	募集停止	108	73
	計	108	540	500
総 合 計		628	2100	1760

※募集人員は440

【天理中学校】【天理小学校】【天理幼稚園】

平成21年5月1日現在

学 部 等	学 科 等	入学定員	收容定員	学生数
天理中学校		200	600	594
天理小学校		※ 125	750	515
天理幼稚園		100	200	107

※募集人員は若干名

以上、大学から幼稚園までの学生数の総計： 6, 180名

(2) 役員・教職員の人数

平成21年5月1日現在

部 門	役 員	教 員		職 員		計
		専任	兼任	専任	兼任	
法人	16			62	23	101
天理大学		154	208	75	41	478
天理図書館				41	15	56
おやさと研究所		6		4	4	14
天理参考館				30	1	31
天理高等学校(第一部)		75	11	31	95	212
天理高等学校(第二部)		37	3	27	50	117
天理中学校		33	5	6	18	62
天理小学校		25	1	5	1	32
天理幼稚園		8		2		10
合 計	16	338	228	283	248	1113

2. 事業の概要

昨今の我が国の学校経営においては、少子化が進行する一方で、大学・学部の新設、さらには幼稚園・小学校・中学校・高等学校の新設による大学への系列化等、時代の変化に対応し、「競争」と「評価」に耐えるべく、様々な改革が行われています。

本法人は、教祖の教えに基づき、「陽気ぐらし世界」の実現に寄与することのできる人材を輩出すべく、「信条教育」を核とする学校教育を推進してまいりました。世情の厳しい学校経営の影響下にあっても、建学の精神の具現化に向けて、絶えざる改革と改善の必要性を確認しつつ、平成 21 年度においては、特に次のような施策と事業を行いました。

まず天理大学においては、一昨年立ち上げた天理大学改革実施委員会によって審議を進め、平成 21 年 4 月に文部科学省に提出した学部・学科の改組案、すなわち、国際文化学部を国際学部に変更し、ここに外国語学科と地域文化学科を置くこと、また、宗教学科の入学定員を 30 名減じ、体育学部の入学定員を 30 名増やすこと等について、天理教教団関係への広報を徹底するために、4 月より 7 月初旬にわたって法人の役職員が分担して、47 都道府県への巡回を行いました。これに伴い、プレスリリースの発信や新聞に企画広告の掲出を行ったほか、ホームページ、大学広報誌「はばたき」や管内教職員向け冊子「学報・天理」を活用して内外に広く改組情報を発信しました。また、この機に本学の知名度をより高めるため阪神甲子園球場に大学名看板を掲出しました。

天理大学が新たな道を歩み出す旬に、建学の精神の更なる徹底を図るべく、管内教職員を対象にした「信条教育講習会」を、永尾教昭・前天理教ヨーロッパ出張所長（当時、本法人総合企画部長。現天理教海外部次長）と、横山一郎・財団法人天理よろづ相談所理事長を講師に迎えて、3 回にわたって開催いたしました。さらには、人権教育推進研修会、施設訪問研修、新任者研修会等を開催して、教職員の資質向上に努めました。

また、管内スポーツ強化に資するべく、天理スポーツ強化推進懇談会を毎月開催するとともに、管内のスポーツの指導者を対象にした講習会を、元ラグビー日本代表の田中伸典氏、毎日放送アナウンサーの赤木誠氏を講師に迎えて開催いたしました。

施設・設備面では、校内のバリアフリー化を進めるために、天理大学体育学部 7 号棟にエレベーターを設置するとともに、7 号棟各階から 6 号棟への渡り廊下を設置し、64C 教室や 64B 教室をはじめとする各所にスロープを設置しました。また、天理大学杣之内キャンパスにおいては、PC 第 3 教室および PC 第 1～6 演習室の機器・設備の入れ替えを行いました。天理プールにおいては、飛び込みプールの改修工事をいたしました。さらには、天理高等学校第二部の女子寮、第二さおとめ寮を閉鎖してさおとめ寮に統合する上から、さおとめ寮の寮生室の改修工事を行い、全室にベッドを設置しました。天理幼稚園が平成 22 年度より 3 歳児保育を開始するに処して、新たな避難用スロープや 3 歳児用のシャワーおよびトイレの設置等の工事をいたしました。また、法人事務所においては、新たな人事・給与システムを導入いたしました。

以下、平成 21 年度の各学校の主な事業を報告いたします。

【天理大学】

＜大学改革・中長期計画＞

平成 22 年度実施予定の大学改革案を、平成 21 年 4 月に文部科学省に申請し、同年 6 月に受理されました。今回の改革は、国際文化学部の改組と体育学部の充実が主な内容で、国際文化学部は「国際学部」と学部名称を変更することになりました。国際学部では、世界のグローバル化が一段と進む現代社会の趨勢にあつて、ローカリズムの重要性を再認識し、グローバル（グローバルに考え、ローカルに行動する）な見地に立って、現代世界が直面するさまざまな課題を、地球的な視野から理解し判断する能力を養い、建学の精神から発する他者への献身の態度をもって国際社会へ積極的に参加する気概と知識を身につけた学生の養成を目指します。国際学部は、国際人に必須の高度な語学力の習得に重点を置く「外国語学科」（入学定員 170 名）と、専修語を習得しながら、自ら参加し行動する実践教育を通して、広域地域における異文化共存についての理解に重点を置く「地域文化学科」（入学定員 180 名）の 2 学科を設置しました。外国語学科には英米語、中国語、韓国・朝鮮語、日本語の 4 専攻を、地域文化学科にはアジア・オセアニア、ヨーロッパ・アフリカ、アメリカスの 3 研究コースを設置しました。また、人間学部宗教学科の入学定員を 30 名減の 50 名とし収容定員 200 名に、体育学部の入学定員を 30 名増の 200 名とし収容定員 800 名にしました。体育学部では、今までのスポーツ・武道・健康の 3 コース制を「競技」「教育」「創造」「健康」「武道」の 5 コース制に拡充しました。

自己点検評価関係は、平成 20 年度の大学評価で（財）大学基準協会より提示された「勧告」と「助言」についての年度ごとの改善状況報告を、学内関係部署に依頼し、回答を受けました。また、今後の学内の自己点検評価の体制について検討し、学長に答申しました。

＜教育・研究＞

教職課程関係では、平成 22 年度の学部改組に伴い、文部科学省に「英語」、「中国語」、「韓国・朝鮮語」の教員の免許状授与の所要資格を得させるための課程認定申請を行いました。また、「教育職員免許法」の改正に伴い、本年度より教員免許更新制度が導入されることになり、本学においても平成 20 年度の試行プログラム実施に引き続き、本年度の教員免許更新講習も奈良教育大学を開設申請者とし、本学はその協力校となり、8 月 19 日、20 日および 10 月 12 日、17 日の 4 回にわたり、体育学部キャンパスにおいて開催しました。12 月 9 日には、神戸親和女子大学において、「天理大学と神戸親和女子大学との間における通信教育部科目等履修に関する協定」の調印式が執り行われ、同協定が締結されました。これにより、本学学生で中学校・高等学校教諭一種免許取得予定者が免許取得を前提とし、神戸親和女子大学通信教育部の科目等履修生として所定の科目（単位）を修得することで、「小学校教諭一種免許状」の取得が可能となりました。また、教職課程の認可を受けている大学として、教員養成教育にこれまで以上の自覚と責任を持ち、大学全体として組織的にも指導体制を整備するうえから、本学に天理大学教員養成教育委員会を設置しました。

平成 22 年度の大学改革実施に伴う「天理大学履修規則」の改正を行いました。その条文

の中には、大学の社会的責任として、学生の卒業時における質の確保を図るべく、厳格な成績評価を行うための一つの方法としてGPA制度の導入も盛り込みました。また、年間登録単位数の上限が3、4年次生は60単位と高いため、今回、単位制度の趣旨に照らし、全学年を通じて年間44単位(各セメスター22単位)を上限とするよう改善しました。

FD関係では、昨年に引き続き、年2回学生による授業評価アンケートを実施しました。また毎年春学期にはFD研修会を実施していますが、本年度は6月に「天理大学におけるFD活動の課題と展望」をテーマに、9号棟で研修会を開催しました。従来は、学外から講師を招いて研修会を行うというものでしたが、本年度は、当期および前期のFD委員長・副委員長がそれぞれ講師を務めて、過去5年間(平成15(2003)年～平成20(2008)年)に実施した、学生による授業評価アンケートの分析を行い、そこから見えてくるFD活動の課題と展望について報告を行いました。このもとで、秋学期には、学部長推薦の教員による公開授業を実施することとし、10月には人間学部、11月には国際文化学部、12月には文学部の教員による公開授業が実施され、参加者はそれぞれ検討会にも出席して、授業担当者との意見交換を行いました。また平成20年度に発足・加盟した「関西地区FD連絡協議会」が主催するさまざまな研修会・セミナーに、FD委員長をはじめ委員が参加し、他校の現状を知るとともに、先進的な取り組みに関する情報収集を行いました。

本学は、日本トレーニング指導者協会による「トレーニング指導者」資格の認定養成校(認定試験受験資格)として認定されました。この「トレーニング指導者」は、日本トレーニング指導者協会(JATI)が認定するものであり、一般人からトップアスリートまで、あらゆる対象や目的に応じて、科学的根拠に基づく適切な運動プログラムの作成と指導ができる専門家であることを証明する資格です。

<学生支援>

昨年度から教職員・学生が信仰を培う場として実施している信仰フォーラム講演会を2回実施しました。第1回目(5月20日)は竹川俊二氏(天理教飾大分教会前会長)に「道は世界へーアジアにおける体験からー」のテーマで、第2回目(12月9日)は小川啓一氏(神戸大学大学院国際協力研究科教授)に「国際協力とお道の信仰」のテーマでそれぞれ講演いただき、教職員・学生が聴講しました。

学生自身が信仰活動を行う上で、いろいろな方に講演や指導を仰ぎたいとの要望があり、学生自治会、よふぼく会、成人会の主催による「ジョイアスセミナー」を2回開催しました。

大学生の大麻所持による逮捕や不法入国外国人による薬物売買などが、社会問題になっていることから、学生がこのような問題に巻きこまれないようにするため、薬物乱用防止講習会を6月15日と12月15日の2回実施しました。講習会では薬物乱用防止のほか、交通マナーについての講習も併せて行いました。

柚之内キャンパス学生相談室のカウンセラーを増員し、常時2名で学生相談ができるよう充実しました。また、本年度より体育学部キャンパスにも新たに学生相談室を開設し、週2日非常勤カウンセラーを配置して相談体制を充実させました。

<国際交流>

学術交流協定では、26校目となる協定校として、4月23日に台湾の致遠管理学院と学術交流協定を結びました。また、11月9日には米国のオハイオ州立大学、12月22日は台湾の国立台湾師範大学と、さらに平成22年3月31日に、29校目として台湾の慈済大学と学術交流協定を締結しました。

学生の交換留学では、協定校からは46名の短期留学生を受け入れ、本学からは50名の学生を派遣しました。

学術・文化交流面では、6月16日から19日まで、台湾の小・中学校の柔道と野球のコーチと、協定校である中国文化大学の柔道部と野球部の学生の合同研修団16名を受け入れ、体育学部で研修を行いました。11月21日、22日の両日、本学と国立台湾大学との共同で公開シンポジウム「台湾と日本における宗教の比較研究」が台湾大学を会場に開催されました。本学からは橋本武人学長をはじめ宗教学科の教授ら7名が出席し、研究成果を紹介し、日台の学術交流に新たな一歩が刻まれました。12月4日から6日にかけて、中国文化大学で開催された「スポーツ指導教育国際会議」に本学から講師として森井博之教授、細川伸二教授が講演を行い、本学学生も7名が参加しました。

また、本学軽音楽部のアルスジャズオーケストラが3月3日から13日にかけてポルトガルを訪れ、協定校のコインブラ大学など4会場でコンサートを開きました。日本とポルトガルの修好150周年の年でもあり、この公演も「日本・ポルトガル修好150周年推進委員会」の認定する正式な交流事業として実施されました。

留学生に日本文化を理解してもらうために、平成19年度から実施しているホームステイ・ホームビジット制度を本年度も実施し、26件の受け入れがありました。

<入試>

オープンキャンパスを3回（7月19日<全学部>、8月29日<全学部>、9月13日<人間・文・国際学部>）実施しました。また、大学祭期間中には入試部による入試相談会を開催しました。その他、入試説明会、高校訪問等の入試広報活動をさらに強化しました。

しかし大学全入時代の到来に伴い、入学志願者の状況はますます厳しくなっており、受験機会の拡大を図る上から、平成22年度入学者選抜は、国際学部への改組にあわせて抜本的な見直しを行い、新規選抜制度の導入や選考方法の多様化など大幅に改めて実施しました。

<広報>

広報に関しては本年も、トピックスや地道な活動などさまざまな本学の魅力を、学内外に発信しました。学外に向けての情報発信として、「パブリシティー」（プレスリリースの発信など）を恒常的に行い、新聞・テレビ・ラジオ・雑誌・フリーペーパー、各機関のホームページなどで、事前の案内や事後の報告記事などを掲載・報道してもらいました。また、各種メディアでの本学教員の露出頻度を増やし、本学の認知度・評価を高める目的で昨年初めて作成した、「教員紹介リスト（冊子とCD-ROM）」の第2版を作成し、県内メディア各社へ配布しました。さらに、本学ホームページで、各種行事案内や報告などの情報を発信

する一方で、平成22年度から国際文化学部が国際学部へと改組するにあたり、トップページのデザインの一部改修や改組情報も発信しました。併せて、一般向け本学紹介の冊子やDVDも作り直しました。大学広報誌『はばたき』は、エリアは限定的ながら、県内体育館や記者クラブ、高校など外部各方面にも配布しました。広告については、全国紙大阪本社版での企画広告、雑誌・大会誌への協賛広告などの掲出、県内テレビでのCM放映などを行いました。また、公開講座や出張授業などは、別項「地域貢献」に記載の通りで、これらの活動並びに教育・研究内容の学外への発信も行いました。

一方、学内・ステークホルダーに向けての情報発信として、学生・教職員や保証人、卒業生などに対しては『はばたき』、ホームページ、『天理大学ふるさと会報（同窓会誌）』（協力）、サイボウズ（学内グループウェア）、「新聞記事に見る天理大学」などを通じて、本学のさまざまな情報を発信し、愛校心や帰属意識を高めました。

<就職支援>

文部科学省の平成21年度「大学教育・学生支援推進事業」に本学が申請した「キャリア&メンタルサポート学生支援プログラム」が7月に採択されました。（財政支援期間3年）それにより新たな就職支援プログラムとして、メンタルサポート研修を実施、具体的にはEQ検査（2回）・自己理解研修（3回）・コミュニケーション研修（5回）・アセスメント研修（3回）等を実施し、メンタル面をサポートしながら個々の対人能力引き上げ、学生が厳しい雇用環境の中でも積極的に就職活動に取り組める力を培えるようにしました。また、同プログラムの実践の一環として、平成22年4月1日から「天理大学サテライトオフィス」を大阪に設置することになりました。今年度後半は、このオフィスのオープンに向け鋭意準備を進め、3月初旬には準備が整い、見学会を実施するに至りました。このオフィスは次年度から、学生の就職活動支援の拠点として、また、本学の情報発信の場として幅広く機能させていきます。

さらに、昨今の雇用環境の悪化や離職者の増加に鑑み、本学卒業生の就職支援に特化した単独・独立の「卒業者就職支援専用ホームページ」を平成22年4月1日から開設することになりました。本学広報部と協力し、その制作にも力を注ぎました。

また、例年通り、就職活動を行う3、4年次生のみならず、1年次生の段階から進路に対する意識を高められるようなサポートを行いました。

まず、入学時に新入生全員に「キャリアデザインシート」（総合適性検査）を実施し自己の適性を把握させ、在学中の明確な目標を設定させる一助としています。そして、人生観・職業観を育成するため、実業界で活躍する卒業生を講師に迎える「キャリアデザイナー人生と職業」の科目を開講しました。さらに、2、3年次生には、「奈良県インターンシップ制度」に参加させ、大学在学中に就業体験をすることにより、職業に対する意識を高めています。

この他にも、1、2年次生対象の進路ガイダンスやセミナーを行い、3年次生に対しては、6月中旬から全12回の進路ガイダンスを実施し、自己分析・企業研究・面接対策など、就職活動に必要なノウハウをすべて習得できるよう支援しました。また、毎年2月には、

企業の人事・採用担当者を大学に招き、学内企業説明会を開催し、本年度は2日間で参加企業は約70社、参加学生は約350名と盛会裏に終えることができました。

さらに、多様化した学生に対して、体系的な支援とともに個別的に丁寧に支援する取り組みも行っています。その一環として平成16年から「キャリア支援ルーム」を開設し、CDAの資格を持つキャリアアドバイザー（就職支援のプロの資格をもつ専門のアドバイザー）を学外から迎えて就職相談を実施しています。本年度はキャリアアドバイザー4名が週5日体制で、個々の学生の要望に応じた就職相談を実施しました。

また、教員との連携を深めるため、「就職情報交換会」を6月と10月の年2回開催し、3、4年次生の担任教員と交流をもちました。この他、就職支援・資格取得講座も充実させ、400名近い学生が受講しました。

<施設・設備>

体育学部キャンパス6号棟にエレベーターを設置し、7号棟の各階へは6号棟から渡り廊下で往来できるように整備しました。また6号棟1階に身障者用トイレも新たに設置し、身障者に対する施設設備の改善を図りました。また体育学部の多目的コートは全面改修工事を行いました。

大学後援会（保証人の会）の寄付により、第2心光館（クラブハウス）を建て替えました。第2心光館は冷暖房完備のうえ、楽器を使用するクラブの部室は、防音対策を施すなど充実した設備となりました。

語学教育の充実に向けて、老朽化した4号棟地下1階のLL教室をCALL教室に改修し、本年度からコンピュータを使用した外国語教育を開始しました。また授業を担当する教員と、今回新たに導入した学生アシスタントに対して、春学期および秋学期の授業開始前に、操作説明会を行いました。本年度は導入1年目ということもあり、まず教員に慣れってもらうための期間という意味合いが強かったのですが、春学期と秋学期に実施した「CALL教室アンケート」によると、教員・学生のいずれからも好評な回答を得ることができました。次年度以降は、語学教育充実のため、教員を中心にCALLサポートスタッフや学生アシスタントの協力を得ながら、各言語の教材(コンテンツ)開発に取り組んでいく予定です。

図書室関係では、前年度に引き続き昭和62(1987)年度以前に整理した資料の目録を、OPAC検索の対象となるよう電子データ化(遡及変換)の作業を進めています。遡及入力で得られたデータをもとに、本年度から数年間の予定で、共同研究室図書の蔵書点検(バーコード貼付、蔵書確認)作業を開始しました。本年度については、国文学国語、宗教、保健体育、図書館学の各共同研究室を対象に、約5万3千冊の図書について作業を行いました。また学内で発行された学術・研究成果の電子データベース化(学術情報リポジトリ)については、昨年度に引き続き印刷資料のPDF化を行いました。

<地域貢献>

教育・研究の内容や成果を、「公開講座」「講演会」をはじめとするさまざまな機会を通じて、広く一般に還元しています。本年も天理市教育委員会や奈良新聞社、奈良県大学連

合等との共催で数多くの公開講座（8シリーズ計25回）を開催しました。その他、学外からの要請に応じて、本学教員が講師として各種の講座、講演会、シンポジウムなどに数多く参加しています。公開講座に関しては、講演内容の要旨を後日、ホームページに掲載する一方で、報告書の作成・学外配布なども行いました。

また、近年需要が高まっているものに、高校以下の教育機関からの「出張授業」等の依頼があり、高校との間では「高大連携」として恒常的に取り組むものと単発のもの、また、中学校からは総合学習の時間への出張依頼、そして、小学校からは英語教育導入にあたっての出張依頼などがあり、一部留学生らも交えながら主に教員が出張し授業を行いました。一方、学生による取り組みも行われており、「学校教育支援」の授業を通じ、中学校などで授業補助を行ったり、「スポーツ科学演習」の一環として幼稚園で体育指導を行ったりしました。また、学科会・クラブなどの活動として、歴史研究会が「オオヤマト古墳群の調査」を、生涯教育専攻が「放課後子ども教室」を、ボランティアサークル同好会マンモスが「知的障がい児支援 あおぞら倶楽部」を行うなど、積極的に社会還元・地域貢献に取り組んでいるクラブは少なくありません。

地域連携としては、天理市商工会と天理本通り商店街からの要請を受ける形で、本学は天理市などとも連携しながら、天理本通りに設けた「てんだりーcolors」を拠点に、専攻やクラブなどがイベントや活動を行うなど、同商店街の活性化に向けて取り組みました。

学内に「天理大学てんだりーcolors 企画会議」を設けているほか、天理市商工会・天理本通り商店街・本学の三者間では「てんだりーcolors 運営委員会」が置かれ、不定期ながら、本学の企画会議で商店街活性化について検討した提案や方向性について運営委員会で協議するほか、「てんりストリート」など大きなイベントについては、三者に天理市や一般ボランティアも加えた実行委員会を設置して実施しました。

実施内容としては、昨年同様、クラブによる展示や体験型のイベント（美術部のお絵かき教室など）、生涯教育専攻の教員による公開授業なども行いましたが、本年は生涯教育専攻生らによる任意団体「ir-neT」が個々の店の活性化に取り組む「お店改善計画」、国際文化化学部の当該コースによる「ブラジルデー」「中国・台湾デー」「メキシコ祭り」、総合教育研究センターによる「森に生きる」など新たな取り組みが始められ、充実してきました。年度末に行われた第2回「年中夢中！てんりストリート 2010」は、前回と比べてプログラムも充実し、実行委員会発足の段階から多くの学生が学生自治会、学科会、クラブを通じて携わり、教職員も参画し、来場者も増えるなど、連携の効果が現れてきています。

<その他>

ヒューマンライツ助成制度による各学部・学科、各部局、学生の自発的な人権啓発活動を継続して行いました。

【天理図書館】

貴重な図書を蒐集・整理し、資料保存とともに利用・公開にも寄与しています。整理では図書整理後は何時でもインターネットにて図書検索ができるようしています。資料保存

では国宝『類聚名義抄』の修復、文化財等の修復整備を行いました。利用では東閲覧室を開架化し、近年に蒐集した天理教文献・一般図書を排架し、利用者には利便性と閲覧向上をめざし、出納業務などは正面カウンターに集中し、それとともに常設展示および展覧会を行いました。

展覧会では天理ギャラリー137回展「うたのほん」（5月17日から6月14日まで）、開館79周年記念展「秋成」（10月19日から11月15日まで）を開催し、それに伴う図録等の出版を行いました。また館報「ビブリア 131号」（5月刊）、「ビブリア 132号」（10月刊）を出版しました。

また、海外図書館の日本古典籍整理担当者19名に対して、3年のステップアップ方式による「天理古典籍ワークショップ（3年目）」（6月15日～19日）を開催し、和（漢）古書資料の書誌情報を作成するための必要な知識・技術等とスキルの修得・涵養を行いました。

【おやさと研究所】

平成21年度は、創立50周年の記念として始めた公開教学講座を、「みかぐらうたの世界を味わう」をテーマとして、前年度に引き続き4月～12月の全9回、道友社ホールにて開催しました。毎回百名を超える受講者があり、その要旨は、『グローバル天理』『天理時報』『みちのとも』に掲載され、多くの関心を集めました。8月26、27日には、国々所々において現代の諸問題に対応できる人材養成を目的とした「教学と現代VI」を、「教理探求の方法論」のテーマで、全6講の講義とディスカッションを行いました。「教学と現代」は、毎回、参加者から、意義ある催しであるとの賛同を得ており、継続的な開催の要請があります。

伝道史料室が行っている伝道フォーラムは、第6回目を「コンゴ伝道における諸活動」をテーマとして、2月26日、本学第一会議室を会場に開催しました。

定例の研究報告会は、215回～225回の11回開催、第53回目の伝道研究会は、3月1日「アメリカスの日系宗教（3）」を、また宗教研究会は、前年度に引き続き「開祖論・教祖論の構築・脱構築」をテーマとして、第16回目を8月1日、第17回目を1月23日に行いました。

また、3月26日には、「天理インターナショナルカンファレンス2010」をスロベニアのリュブリャナ大学と合同で「異文化相互の視点における生、死、そして死ぬこと」をテーマに、本学第二会議室を会場に開催しました。

出版物としては、定期の月刊誌「グローバル天理」をはじめ、年刊の「Tenri Journal of Religion」「おやさと研究所年報」、「伝道参考シリーズ」の20巻目となる『おさしづ用語の新研究』を、「グローバル新書」は、第10巻『天理教経営論創総説』を刊行しました。

教祖百二十年祭後の次の塚を目指して3年目となる平成21年度は、当初立てた計画をスムーズに遂行することができました。

【天理参考館】

企画展『テル・ゼロール遺跡－日本調査隊の軌跡－』（4月～6月）、『世界の民族楽器－技が伝える時代のハーモニー』（7月～11月）、新春展『南海電車展－鉄道コレクターの軌跡－』（1月～3月）、およびスポット展『五月人形飾り』『御殿飾り雛人形』などを開催しました。企画展関連イベントとして開催した民族楽器コンサート（2回）は好評でした。ほかにトーク・サンコーカン（公開講演会／10回）、ワークショップ『バリガムラン』『織物教室』などのほか、天理ギャラリー展『ギリシアの古代美術』『鉄道旅行の味わい－食堂車メニューと駅弁ラベルに見る旅の食文化－』を開催しました。また新しい企画として、前年度3月から開催したミュージアムコンサート『参考館メロディユー』（天理教音楽研究会共催）を継続しました。

昨年度から始めた寄贈資料の整理、登録業務を進めました。通常業務としては考古美術・生活文化資料の収蔵品および研究用図書の実を図り、資料の調査研究、整理、修復・保存処理を行いました。出版物として天理参考館報、企画展図録を刊行しました。広報としてはホームページ、情報誌、マスコミ、ポスター等のほか、『天理参考館ニュースレター』を発行するなど、館活動の情報の発信を継続して行い、広報活動の実を図りました。その他資料熟覧、資料貸出、資料写真掲載・映像取材などの協力、および博物館実習を実施しました。

来館者に喜んでいただけるよう、親切な接客、博物館情報の提供、館内の美化等に取り組み、また、管内各学校、天理市内の小・中学校への当施設利用の促進の働きかけを継続しつつ、新たに全国の学校施設に拡大して働きかけを行いました。

平成22年に迎える創立80周年に向けて、年史、特別展についての検討を継続しました。

【天理高等学校第一部（全日制）】

学校創立百周年を終え、次の塚へ向かって新たな第一歩を踏み出す年となりました。

全国的に新型インフルエンザが広がりを見せる中、本校においても7月下旬に最初の罹患者が確認されてより年度末を迎えるまでこの対応に追われましたが、この事を通して危機管理について改めて点検することができました。

信条教育の実を図るために、教職員では2年間にわたり「つとめ」についての研修を実施し、おつとめの大切さを学びました。そして、校内ひのきしん、こどもおぢばがえりひのきしんへの積極的な関わり、また、60回を迎えた校内講演大会を聴講するなど、生徒とともに動くことを目指しました。

進路指導においては、進路希望調査を具体的に記入（第三希望まで）させることで、受験プランを明確にさせたり、例年実施してきた大学・短大・専門学校の説明会にも、希望の多かった大学を招聘し、生徒の進路意識を高めることに努力しました。

進学指導面では、天理大学への進学指導、塾との連携による課外活動、夏季・冬季講習や合宿勉強会、土日を利用しての補習やセンター試験対策を行いました。その結果、天理大学合格者120名をはじめ、国公立私立大学に合格者を多数出しました。昨年に引き続き、

1・3類から5名の国公立合格者が出たことや、センター受験希望者の増加、そして、1類1年生の課外講習受講者が増えてきたことは、これまでの教員の取り組みの成果が出てきたのではないかと考えられます。併せて、授業の充実や生徒指導等の更なるスキルアップのため、校内での授業研究会や奈良県立教育研究所の「研修講座」への参加、そして、外部から講師を招いての生徒指導研修・人権教育に多くの教職員が参加しました。

施設面では、本年度より女子寮の「東寮」が全面移転・改名し、「みのり寮」として新たなスタートを切りました。落ち着いた環境の中で、より充実した信条教育・学習活動に努めました。

クラブ活動では、本県で高校総体が開催され、柔道部<個人：優勝>、水泳部、ホッケー一部<男女>、ソフトボール部、バレーボール部、卓球部<個人>が出場するとともに、吹奏楽部、バトン部、合唱部が開会式に出演し花を添えました。新潟国体では、ホッケー一部男子が2年連続優勝し、水泳部は個人競泳で優勝を果たしました。文化系では、吹奏楽部とバトン部が昨年に引き続き全国大会に出場しました。また、野球部が3年ぶり24回目の夏の全国大会へ、そして3年連続20回目の全国選抜大会へ出場するなど、多くのクラブが日頃の練習の成果を遺憾なく発揮しました。

学校評価は、昨年度に引き続き全教職員を対象に実施するとともに、新たに学寮指導員にも実施しました。継続して行うことで、取り組まなければならない課題も明確になりました。

【天理高等学校第二部（定時制）】

年度始めに、学級担任が生徒の状況を早期かつ的確に把握するため、10回にわたり一斉面談を実施しました。この間、短縮授業を実施し、放課後に20分間の面談時間を設けました。

学級経営の充実を目指し、各学年ごとにホームルーム年間指導計画を作成し、指導内容を明確にし、入学から卒業までの長期展望に立った適切な指導ができるように配慮しました。

近年、生活環境、人間関係などの面において、うまく適応できずに心身に極端な不調を来し学業を続けることができなくなる生徒が増えています。こうした生徒への対応に関して、二部保健部の教育心理相談係が学校本部健康管理室との連携を強めて指導にあたりました。個々の生徒の指導を学級担任や学年担当者だけが抱え込むことなく、専門的な見地からの助言と支援が必要となっています。そこで、次年度へ向けて保健部から教育心理相談係を独立させ、校内教育心理相談室を発足させるべく検討と準備を行いました。

夏季休業中、平成25年度(一部24年度)実施の新学習指導要領による教育課程説明会が、文部科学省・奈良県教育委員会主催で行われ、全教科の部会に代表教職員が参加しました。校内では平成25年度に向けて、新教育課程への移行措置を検討し、各年度の教育課程表を作成しました。今後各教科においては授業内容についての検討が必要となります。

夏季に開催された全国定時制通信制体育大会には、8クラブ約155名の選手が参加し、

8年連続 18 回目優勝の卓球部女子、2年連続 10 回目優勝のバスケット部女子、3年連続 6 回目優勝の軟式野球部など、例年にもまして優秀な成績を残しました。

介護福祉科においては、7期生 27 名が学科開設以来はじめて介護福祉士国家試験に全員が合格しました。9期生である2年生は現行カリキュラム履修のまま、新制度試験を受けるといふ変則的な扱いになりますので、実際の授業カリキュラムを新制度カリキュラムに合わせるべく内容の研究と指導の充実を図りました。

4 回目を迎えたオープンスクールは、11 月 25 日(水)に実施しました。平日であったため参加者数 245 名と昨年並みになりました。例年通り 1 時限目から 4 時限目の全授業と放課後の部活動を公開しました。参加者は受験生と保護者、学校関係者、在校生の保護者、天理教教会関係者などとなり、文字通りオープンな学校公開になりました。さらにこの機に併せて学校説明会と個別相談会も実施し、本校の教育内容について理解を深めていただきました。

学校職員・学寮職員懇談会も 4 年目をむかえて、学校と学寮の密接な連携と寮職員の研修の場として定着しています。

【天理中学校】

昨年度は創立百周年という大きな旬のおかげをもって、形の上での成人の姿をお見せいただき、本年度もその延長線上に立って、更なる成人を目指しました。正門での一礼がより一層生徒たちに定着し、挨拶を含む礼儀作法もより徹底されるなど、建学の精神の実現に向けても心新たに前進をさせていただくことができました。

また、3年生の修学旅行、2年生の野外活動錬成会の日程にあわせて、一昨年度から1年生に実施している「グループワーク」は、本年も天理教学生担当委員会の全面的なご協力を仰いで実施でき、生徒たちのコミュニケーション力を高める上で所期の効果を上げることができました。その後の学級活動の中にも同手法のエクササイズを実施し、クラス経営の上に引き続きの成果を得たクラスもあり、今後もその流れを大切にしていきたいと思えます。

ここ数年、各行事ごとにアンケートを採りながら P.D.S を重ねておりますが、改善に向けて一歩ずつ歩むことができました。また昨年に引き続き、自己点検評価も実施しました。評価の低い項目では、研修に関することがあり、研修は教員にとって欠かすことのできない要件でありますので、今後改善を図るつもりであります。

教育環境の更なる整備としては、来賓用男子トイレ、2階3階中央男子トイレの小便器取り替え、4階吹奏楽練習場他のエアコン設置が大きなものとしてあげられます。

なお、本年度本校として最も大きな出来事の一つは、新型インフルエンザの来襲でした。結果的には2度にわたる学校閉鎖を余儀なくされました。その中であって、奇跡的に運動会も開催でき、この節を通して生徒たちがむしろ一段の成人を見せてくれました。続く音楽会は中止せざるを得ませんでした。これも本校講堂を会場に学年毎の合唱発表会という形で実施し、特に3年生の真剣で心のこもった歌声に、居合わせた職員全員が心を打た

れました。まさに「節から芽が出る」ご守護を感じさせていただきました。

また、本年度の特記事項としては、本校始まって以来初めて「学校説明会」を実施したことがあります。多方面のご協力を得ながら初めての取り組みを無事成功裏に終えさせていただきます、志願者の増加に繋げることができました。

【天理小学校】

昨年度と同様、各教室と講堂に「朝起き・正直・働き」の校訓を掲げ、あらゆる機会を通して校訓についての思いを述べ、実践の徹底を図っております。

4年前の自己点検に端を発し、「信条の授業」の充実を図ってきました。それぞれの学年に応じたテーマのもとに信条の授業案を作成し、それに基づいて公開授業を2年間で4回実施しました。時には、他の教員の授業案をもとに追試を行い、よりよい授業案の作成を目指してきました。その集大成として、平成23年度当初に「信条教育主題指導案集(仮題)」を発刊いたします。

第一時限の前の20分を「天小タイム」として、基礎基本の徹底を図って以来9年が経過しました。計算練習・漢字・音読・暗唱などを中心としたものですが、着実に学力が向上し、学力テストの平均偏差値では、8ポイント全国平均を上回りました。また、五段階評定の「1」「2」の数値が減少しました。課題は、昨年と同様、中・上位層をいかに伸ばすかにあり、今後も継続していきます。

本年度も、オーケストラ・合唱・水泳といった特別クラブでの活躍が顕著でした。合唱クラブは県大会で1位となり、近畿大会へ進み銅賞を得ました。オーケストラは、創部以来初めて3つの部門で西日本大会に進み、合奏部門で全国大会に進みました。昨年のように文部科学大臣奨励賞には紙一重で届きませんでした。日頃の努力の成果を遺憾なく発揮してくれました。水泳部は、県大会や西日本私学大会などでトップレベルの実力を示してくれました。とりわけ、私学大会は、「なみはやドーム」での開催という環境の良さもあって、6つの新記録を出すという快挙を果たしました。

研修につきましては、20ページに及ぶ「職員研修計画」に基づき、「信条の公開授業」「模擬授業」をはじめとして、26回の研修機会を設けました。「模擬授業」は、一度に多くの教員が取り組める研修スタイルであり、授業力向上の上でたいへん有効でありました。教員が、常に学ぶ姿勢をもつことによって、より児童を引きつける授業、よりよい生活指導がなされます。本年度も、研修の集大成として「教育実践記録」を発行いたします。

本年度は、教職員の「学校運営自己評価」の点検項目と「保護者アンケート」との項目をできる限り共通の視点で設定しました。「信条教育」と「学習指導」の面では両者にそれほど差は見られませんでした。しかし、「生活指導」においては認識に大きな差がありました。「生活指導」における個人的な事象は公開できませんので、細部にわたる指導は保護者に理解されにくいという側面はありますが、今後はこの差を埋めるべく努力を重ねます。

「天小だより」は、育友会と連携しつつ例年通り発行できました。「布留からの発信」は、インフルエンザの影響で発行できない日が多くありましたが、昨年とほぼ同じ134号(昨

年は136号)を発行いたしました。休日を除きますと、2日に1回の発行でしたが、「保護者アンケート」でも高く評価していただいております。学級通信では、500回を記録したクラスもあり、こうした熱意は全ての教育活動の基盤であり、学校全体に、より良き学級づくりを目指す土壌ともなっております。

【天理幼稚園】

創立の精神を心にきざみ、この幼児期に人間として、また「よふぼく」としての素地を育てることが本園の使命であることを自覚し、その重みと喜びをかみしめ、教職員一同が「一手一つ」に歩ませていただきました。

幼児一人ひとりが充実した園生活を送ることができるよう、保育内容の充実に努めました。また、幼児一人ひとりの育ちや課題を常に報告しあい、共通理解のもと、一人ひとりの育ちに応じた丁寧な援助ができるよう、教職員間の連携体制の充実に努めました。

保護者への情報提供の充実を図るために、園児の活動や行事の紹介のみならず、園の環境改善面や教員の活動など、昨年以上にプリントにして配布しました。また、園児の遊びや活動、行事などの様子を毎月スナップ写真として展示し、本園の教育に対して理解していただき、連携が深められるよう努力しました。

昨年に引き続き、2回目の学校評価アンケートを保護者および教職員に実施しました。保護者には、集計結果とともに分析と考察を加え文書で報告しました。保護者のアンケート集計結果は、昨年に続き全体的に高い評価をいただきました。その中でも、「園は、子どもに温かい態度で接し、子どもと信頼関係を築いている」「子どもは幼稚園へ行くのが楽しいと言っている」の2項目については、特に高い評価を受けました。保護者と教職員の信頼関係が築けてこそ、園児の安定につながり、安定してこそ自己発揮することができ、遊びの充実につながるという連関性がありますので、教職員にとって最大の喜びとするところです。しかし、少数ではあるものの評価の低い項目があることを重く受け止め反省し、今後の課題として更なる改善に向けて取り組んでいきます。

長年にわたる懸案であった3歳児保育の導入が8月に決定し、同時に預かり保育も導入することとなり、平成22年度より実施する運びとなりました。本年度は、その新体制に向け、3歳児保育の運営について様々な資料や指導書を参考にしたり、他園の3歳児保育を見学するなどして全教員で検討を重ね、3歳児の教育課程を作成しました。また従来、月1回実施していた3歳児未就園児保育を、9月より2歳児、3歳児の未就園児保育に切り替えて実施しました。平成22年度よりの新体制(3歳児保育・預かり保育)について、在園児、新入児4歳、新入児3歳の保護者対象に、3回に分けて説明会を行い、理解と協力が得られるようにしました。

園内の環境を見直し、コンクリートの階段状の昇降口をフラットおよびスロープ化し、トイレの便器を幼児向きの洋式および小便器に取り替えました。また、テラスの従来のコンクリートの手洗い場を撤去し、ステンレス製の手洗い・足洗い場を新設しました。その他、3歳児の保育室への手洗いシンク新設、シャワー室新設、新館園舎2階への避難すべ

り台設置、広い運動場を仕切るための簡易フェンスの設置など、3歳児を含む全園児にとって安全で生活しやすい環境に大幅に改善しました。また、3歳児用のキャビネット、机、椅子を購入するとともに、新体制にともなう教員増のため、職員室の整備もいたしました。

3. 財務の概要

(1) 平成 21 年度決算の概要

平成 21 年度決算について、予算と対比してその概要を報告します。

○ 資金収支計算

(単位：千円)

●収入の部			
科 目	予 算 額	決 算	差 異
学生生徒等納付金収入	3,228,823	3,388,355	△ 159,532
手数料収入	74,837	75,701	△ 864
寄付金収入	3,250,500	3,251,160	△ 660
補助金収入	1,252,589	1,260,021	△ 7,432
資産運用収入	54,157	59,984	△ 5,827
資産売却収入	300	510	△ 210
雑収入	281,656	308,612	△ 26,956
前受金収入	620,550	548,415	72,135
その他の収入	303,810	338,524	△ 34,714
資金収入調整勘定	△ 876,194	△ 928,536	52,342
前年度繰越支払資金	4,378,655	4,378,655	
収入の部合計	12,569,683	12,681,401	△ 111,718

●支出の部			
科 目	予 算 額	決 算	差 異
人件費支出	6,388,628	6,160,675	227,953
教育研究経費支出	1,222,489	1,161,355	61,134
管理経費支出	401,768	390,313	11,455
借入金等利息支出	7,453	7,453	0
借入金等返済支出	100,000	100,000	0
施設関係支出	73,450	76,743	△ 3,293
設備関係支出	299,074	245,002	54,072
資産運用支出	1,315	234,728	△ 233,413
その他の支出	1,281,600	1,360,152	△ 78,552
予備費	52,000	0	52,000
資金支出調整勘定	△ 939,981	△ 992,438	52,457
次年度繰越支払資金	3,681,887	3,937,418	△ 255,531
支出の部合計	12,569,683	12,681,401	△ 111,718

収入の部では学生生徒等納付金収入が見込みを上回り1億5953万円の収入超過となりました。手数料収入はほぼ見込みどおりとなっています。寄付金収入は宗教法人天理教より32億5千万円、その他の寄付金が116万円ありました。補助金収入は国庫補助金収入、地方公共団体補助金収入ともほぼ見込みどおりとなりました。資産運用収入は債券等の運用益により583万円の収入超過となっています。雑収入は私立大学退職金財団等交付金収入が増額、また、科学研究費補助金の間接経費が増えたため収入超過となりました。当年度収入合計は前年度の86億6347万円より3億1913万円減少して83億4434万円となり、前年度繰越支払資金を加えた収入の部合計では126億8140万円となりました。

支出の部では人件費支出が期末勤勉手当支給率の減、早期退職者特別退職金が予定より減額したことなどから予算額より2億2795万円下回っています。施設設備の整備・改修としての主な支出は、1. 大学体育学部6号棟エレベーター設置、6号棟・7号棟渡り廊下設置及び校舎改修、2. 大学体育学部多目的便所建築、3. 大学天理プール（飛び込み）改修、4. 大学体育学部多目的人工芝コート改修、5. 大学体育学部駐輪場構築、6. 大学柚之内キャンパス立て看板固定台設置、7. 大学3・4号棟エアコン追加設置、8. 大学PC教室等機器更新、9. 大学血流画像化装置購入、10. 大学3次元遺跡調査システム購入、11. 大学公用車購入、12. 大学男子寮（柚之内ふるさと寮）寮生室改修、13. 図書館所蔵重要文化財保存修理、14. 参考館オルメカ文明石頭レプリカ作成、15. 高校電話交換機更新、16. 高校一部男子寮（北寮）西側擁壁改修、便所小便器取替、暖房用ボイラー更新、17. 高校二部男子寮（陽心寮）食堂エアコン設置、18. 高校二部女子寮（さおとめ寮）改修及び食堂エアコン設置、19. 高校公用車購入、農事部トラック購入、20. 中学校教室棟便所改修、21. 幼稚園園舎等改修、手洗い場構築、避難すべり台設置などです。日本私立学校振興・共済事業団からの借入金にかかる返済支出は予算通り1億円、同利息分が745万円です。資金支出は合計で126億8140万円となり、そのうち次年度繰越支払資金は39億3742万円となりました。

○ 消費収支計算

(単位：千円)

●消費収入の部			
科 目	予 算 額	決 算	差 異
学生生徒等納付金	3,228,823	3,388,355	△ 159,532
手数料	74,837	75,701	△ 864
寄付金	3,261,670	3,466,252	△ 204,582
補助金	1,252,589	1,260,021	△ 7,432
資産運用収入	54,157	59,984	△ 5,827
雑収入	281,656	552,692	△ 271,036
帰属収入合計	8,153,732	8,803,005	△ 649,273
基本金組入額合計	△ 472,500	△ 423,714	△ 48,786
消費収入の部合計	7,681,232	8,379,291	△ 698,059

●消費支出の部			
科 目	予 算 額	決 算	差 異
人件費	6,389,828	6,212,382	177,446
教育研究経費	1,979,089	1,914,122	64,967
管理経費	444,348	730,247	△ 285,899
借入金等利息	7,453	7,453	0
資産処分差額	17,200	16,240	960
予備費	52,000	0	52,000
消費支出の部合計	8,889,918	8,880,444	9,474

当年度消費支出超過額	1,208,686	501,153	
前年度繰越消費支出超過額	9,035,533	9,035,533	
基本金取崩額	0	154,436	
翌年度繰越消費支出超過額	10,244,219	9,382,250	

《前記の資金収支と共通の科目があるので、消費収支特有のものについて説明します。》

消費収入の部では、帰属収入合計が予算比 8.0%増の 8 億 3 0 1 万円（前年度比では 1.4%〈1 億 2 3 8 3 万円〉の増）となりました。基本金組入額合計が、予算比 10.3%減の 4 億 2 3 7 1 万円となり、消費収入合計は予算比 9.1%増の 8 3 億 7 9 2 9 万円（前年度比では 8.5%〈6 億 5 3 8 5 万円〉の増）となりました。消費収入特有の現物寄付としては大学後援会等より第 2 心光館建物及び図書館の受贈、図書館貴重書の受贈、参考館資料の受贈等があり、寄付金は 3 4 億 6 6 2 5 万円（前年度比では 1.5%〈5 1 1 7 万円〉の増）となり

ました。

消費支出の部では、人件費に退職給与引当金繰入額7億4243万円を含み、資金収支計算での人件費支出との差額は5171万円となっています。土地整理のうえから、宗教法人天理教に寄付した土地の評価額を管理経費に計上し、貸借対照表計上額との差額を雑収入としています。教育研究経費には6億9021万円、管理経費には3191万円の減価償却費を含み、消費支出の部合計ではほぼ予算通りの88億8044万円（前年度比では4.1%〈3億7965万円〉の減）となりました。

当年度消費収支差額は5億115万円の消費支出超過額（前年度は15億3465万円の消費支出超過額）となり、前年度繰越消費支出超過額を加え基本金取崩額を控除した翌年度繰越消費支出超過額は93億8225万円となりました。

○ 貸借対照表

（単位：千円）

●資産の部			
科 目	本 年 度 末	前 年 度 末	増 減
固定資産	28,639,014	28,730,208	△ 91,194
有形固定資産	26,431,200	26,758,168	△ 326,968
その他の固定資産	2,207,814	1,972,040	235,774
流動資産	4,235,369	4,725,940	△ 490,571
資産の部合計	32,874,383	33,456,148	△ 581,765

●負債の部			
科 目	本 年 度 末	前 年 度 末	増 減
固定負債	1,694,883	1,743,175	△ 48,292
流動負債	1,764,152	2,220,185	△ 456,033
負債の部合計	3,459,035	3,963,360	△ 504,325

●基本金の部			
科 目	本 年 度 末	前 年 度 末	増 減
第1号基本金	38,009,016	37,739,857	269,159
第3号基本金	138,582	138,464	118
第4号基本金	650,000	650,000	0
基本金の部合計	38,797,598	38,528,321	269,277

●消費収支差額の部			
科 目	本 年 度 末	前 年 度 末	増 減

翌年度繰越消費支出超過額	△ 9,382,250	△ 9,035,533	△ 346,717
消費収支差額の部合計	△ 9,382,250	△ 9,035,533	△ 346,717
負債の部、基本金の部及び 消費収支差額の部合計	32,874,383	33,456,148	△ 581,765

《貸借対照表は、平成 22 年 3 月 31 日現在の資産、負債、基本金等の状況を前年度末と対比させて表示しています。》

資産の部では有形固定資産が施設設備の充実及び受贈等による増加と資産の除却による減少及び減価償却を差し引いて、前年度末から 3 億 2 6 9 7 万円減、その他の固定資産は有価証券等の増により 2 億 3 5 7 7 万円増額しています。流動資産は現金預金の減少等により 4 億 9 0 5 7 万円の減となり、資産の部合計では差引 5 億 8 1 7 6 万円減の 3 2 8 億 7 4 3 8 万円となりました。負債の部では借入金、未払金、前受金、預り金が減少し。退職給与引当金が増加したので差引 5 億 4 3 3 万円減の 3 4 億 5 9 0 3 万円となっています。基本金の部では 2 億 6 9 2 8 万円の基本金組み入れを行いましたので、総額 3 8 7 億 9 7 6 0 万円となりました。

消費収支差額の部合計は、消費収支計算の翌年度消費支出超過額と同額の 9 3 億 8 2 2 5 万円の消費支出超過となっています。資産の部合計から負債の部合計を差し引いた正味財産は 2 9 4 億 1 5 3 5 万円となりました。

(2) 経年比較

財務状況について、収支計算書及び貸借対照表の大科目又は主な科目の過去 5 年間の推移を記載します。

(単位：千円)

資金収支計算書					
●収入の部					
科 目	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
学生生徒等納付金収入	3,555,524	3,565,348	3,502,470	3,450,498	3,388,355
手数料収入	106,173	95,120	81,407	75,177	75,701
寄付金収入	3,532,353	3,401,000	3,416,733	3,390,877	3,251,160
補助金収入	1,267,729	1,396,862	1,393,259	1,257,913	1,260,021
資産運用収入	35,144	42,788	56,214	60,029	59,984
資産売却収入	50	4,240	7,480	16,311	510
雑収入	162,821	353,622	335,837	412,667	308,612
前受金収入	675,032	660,607	637,943	638,723	548,415
その他の収入	243,535	139,882	313,255	389,120	338,524
資金収入調整勘定	△ 819,066	△ 983,209	△ 963,517	△ 976,467	△ 928,536
前年度繰越支払資金	6,532,203	5,607,168	5,812,883	5,056,219	4,378,655

収入の部合計	15,291,498	14,283,428	14,593,964	13,771,067	12,681,401
--------	------------	------------	------------	------------	------------

●支出の部					
科 目	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
人件費支出	6,267,450	6,878,413	6,545,166	6,779,260	6,160,675
教育研究経費支出	1,277,440	1,226,148	1,152,133	1,206,959	1,161,355
管理経費支出	355,789	322,067	343,176	419,252	390,313
借入金等利息支出	13,782	12,200	10,618	9,035	7,453
借入金等返済支出	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
施設関係支出	1,182,571	84,025	882,432	984,777	76,743
設備関係支出	313,675	237,696	226,910	261,093	245,002
資産運用支出	16,470	7,197	105	142	234,728
その他の支出	1,020,922	865,931	1,263,672	987,508	1,360,152
資金支出調整勘定	△ 863,769	△ 1,263,132	△ 986,467	△ 1,355,614	△ 992,438
次年度繰越支払資金	5,607,168	5,812,883	5,056,219	4,378,655	3,937,418
支出の部合計	15,291,498	14,283,428	14,593,964	13,771,067	12,681,401

(単位：千円)

消費収支計算書					
●消費収入の部					
科 目	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
学生生徒等納付金	3,555,524	3,565,348	3,502,470	3,450,498	3,388,355
手数料	106,173	95,120	81,407	75,177	75,701
寄付金	3,623,874	3,410,852	3,425,909	3,415,086	3,466,252
補助金	1,267,729	1,396,862	1,393,259	1,257,913	1,260,021
資産運用収入	35,144	42,788	56,214	60,029	59,984
資産売却差額	50	0	0	7,807	0
雑収入	162,821	353,622	335,837	412,668	552,692
帰属収入合計	8,751,315	8,864,592	8,795,096	8,679,178	8,803,005
基本金組入額合計	△ 1,499,539	△ 391,998	△ 1,126,131	△ 953,736	△ 423,714
消費収入の部合計	7,251,776	8,472,594	7,668,965	7,725,442	8,379,291

●消費支出の部					
科 目	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
人件費	6,186,258	6,729,514	6,664,826	6,746,319	6,212,382
教育研究経費	2,052,310	1,990,639	1,891,658	1,960,866	1,914,122

管理経費	402,078	367,831	385,682	460,866	730,247
借入金等利息	13,782	12,200	10,618	9,035	7,453
資産処分差額	63,126	19,023	37,399	83,004	16,240
消費支出の部合計	8,717,554	9,119,207	8,990,183	9,260,090	8,880,444
当年度消費支出超過額	1,465,778	646,613	1,321,218	1,534,648	501,153
前年度繰越消費支出超過額	4,077,556	5,543,334	6,189,947	7,511,165	9,035,533
基本金取崩額	0	0	0	10,280	154,436
翌年度繰越消費支出超過額	5,543,334	6,189,947	7,511,165	9,035,533	9,382,250

(単位：千円)

貸借対照表					
●資産の部					
科 目	17年度末	18年度末	19年度末	20年度末	21年度末
固定資産	28,548,473	28,053,888	28,347,694	28,730,208	28,639,014
流動資産	5,755,806	6,129,653	5,366,169	4,725,940	4,235,569
資産の部合計	34,304,279	34,183,541	33,713,863	33,456,148	32,874,383
●負債の部					
固定負債	2,105,355	1,856,456	1,876,116	1,743,175	1,694,883
流動負債	1,675,522	2,058,299	1,764,048	2,220,185	1,764,152
負債の部合計	3,780,877	3,914,755	3,640,164	3,963,360	3,459,035
●基本金の部					
第1号基本金	35,278,635	35,670,500	36,796,535	37,739,857	38,009,016
第3号基本金	138,101	138,233	138,329	138,464	138,582
第4号基本金	650,000	650,000	650,000	650,000	650,000
基本金の部合計	36,066,736	36,458,733	37,584,864	38,528,321	38,797,598
●消費収支差額の部					
翌年度繰越消費支出超過額	△ 5,543,334	△ 6,189,947	△ 7,511,165	△ 9,035,533	△ 9,382,250
消費収支差額の部合計	△ 5,543,334	△ 6,189,947	△ 7,511,165	△ 9,035,533	△ 9,382,250
負債の部、基本金の部及び消費収支差額の部合計	34,304,279	34,183,541	33,713,863	33,456,148	32,874,383

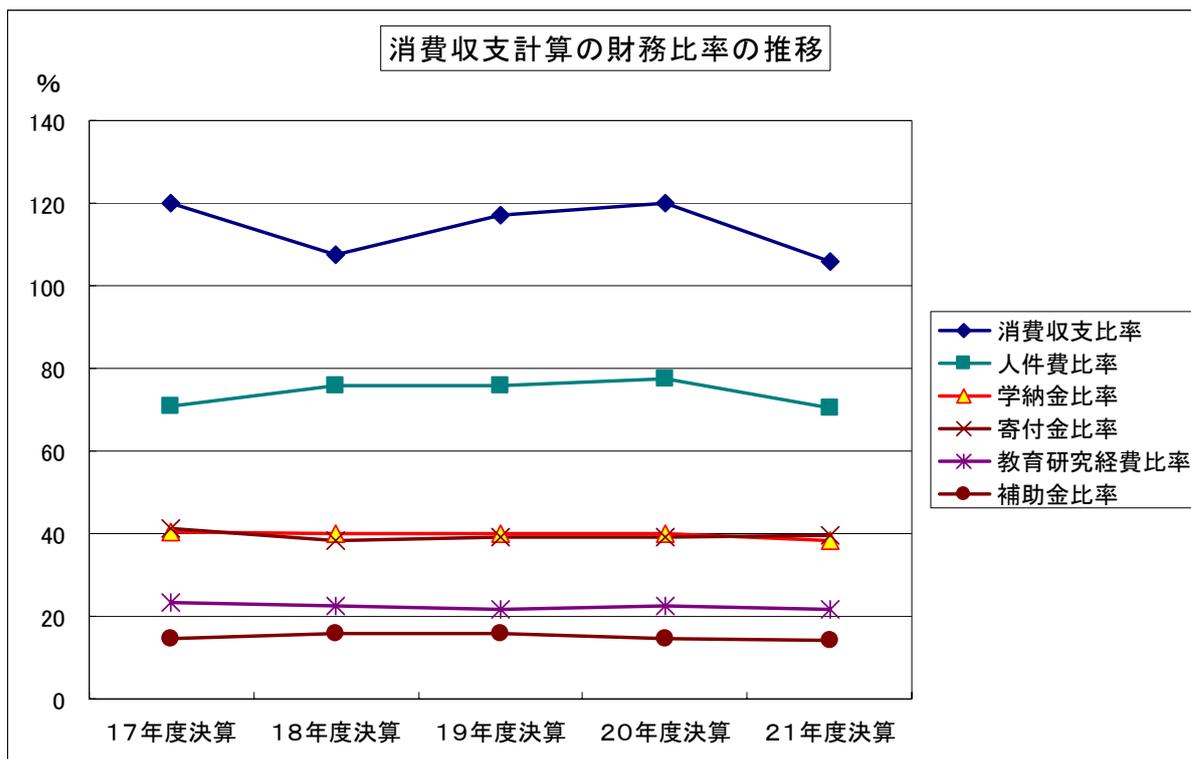
(3) 主な財務比率の推移

主な消費収支計算書関係比率と貸借対照表関係比率の過去5年間の推移を掲載し、一部の比率についてグラフにより概要を説明します。

(単位:%)

比 率	算 式 (×100)	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
人件費比率	$\frac{\text{人件費}}{\text{帰属収入}}$	70.7	75.9	75.8	77.7	70.6
人件費依存率	$\frac{\text{人件費}}{\text{学生生徒等納付金}}$	174.0	188.7	190.3	195.5	183.3
教育研究費比率	$\frac{\text{教育研究経費}}{\text{帰属収入}}$	23.5	22.5	21.5	22.6	21.7
管理経費比率	$\frac{\text{管理経費}}{\text{帰属収入}}$	4.6	4.1	4.4	5.3	8.3
借入金等利息比率	$\frac{\text{借入金等利息}}{\text{帰属収入}}$	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1
帰属収支差額比率	$\frac{\text{帰属収入}-\text{消費支出}}{\text{帰属収入}}$	0.4	△2.9	△2.2	△6.7	△0.9
消費収支比率	$\frac{\text{消費支出}}{\text{消費収入}}$	120.2	107.6	117.2	119.9	106.0
学生生徒等納付金比率	$\frac{\text{学生生徒等納付金}}{\text{帰属収入}}$	40.6	40.2	39.8	39.8	38.5
寄付金比率	$\frac{\text{寄付金}}{\text{帰属収入}}$	41.4	38.5	39.0	39.3	39.4
補助金比率	$\frac{\text{補助金}}{\text{帰属収入}}$	14.5	15.8	15.8	14.5	14.3
自己資金構成比率	$\frac{\text{自己資金}}{\text{総資金}}$	89.0	88.5	89.2	88.2	89.5
流動比率	$\frac{\text{流動資産}}{\text{流動負債}}$	343.5	297.8	304.2	212.9	240.1
負債比率	$\frac{\text{総負債}}{\text{自己資金}}$	12.4	12.9	12.1	13.4	11.8
基本金比率	$\frac{\text{基本金}}{\text{基本金要組入額}}$	97.7	98.0	98.4	98.6	98.9

※「総資金」は負債＋基本金＋消費収支差額を、「自己資金」は基本金＋消費収支差額をあらわす。



消費収支比率は100%を恒常的に上回り、21年度では6.0ポイント上回りました。人件費比率は18年度以降は停年退職者による退職金の増加によりアップしていましたが、21年度では20年度に比べて7.1ポイント下降し、70.6%となりました。学生生徒等納付金比率（学納金比率）及び寄付金比率はほぼ横ばい状態で推移しています。教育研究経費比率は管理経費が寄付金支出により増額したため0.9ポイント下げています。補助金収入は、20年度とほぼ同額でしたが、比率は0.2ポイント下がりました。